

琉球大学学術リポジトリ

自閉症児の姿勢・運動の特性とその認識論的意味

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/887

自閉症児の姿勢・運動の特性とその認識論的意味

神 園 幸 郎

Characteristics and Epistemological Meanings of Postures and Movements in Children with Autism

はじめに

従来から自閉症児には大筋運動の制御欠陥、運動模倣の欠如、奇妙な運動ジェスチャー (Wing, 1976; Hermelin & O'Connor, 1970; Ornits, 1974; DeMyer, 1976) などの運動の障害があることが指摘されている。DeMyer (1976) によれば、自閉症児の運動能力は境界線あるいはそれ以下の水準にあり、自発的な物の操作は容易であっても、視覚的手がかりを記憶してこの手がかりを自分自身の身体に関連づける必要がある課題、例えば動作の模倣などになると極端に困難を示すようになることとされている。また、対象の動きを視覚的に捉えてそれに合わせて自己の身体を対応させるボール遊びのような課題でも自閉症児特有な困難性を示すことも指摘されている。DeMyer (1976) はこうした事実に基づいて視覚-運動的活動を計画し実行する能力の欠如、例えば運動模倣の困難性などが社会的引きこもりの原因になっている可能性を示唆した。

近年、自閉症者の回顧録などでもしばしば身体感覚の認識障害や身体図式の形成不全を疑わせるような記述が随所に見られ、(例えば、William, 1992; William, 1995)、自閉症状と身体の姿勢や運動・動作の障害が密接に関係している可能性を想定できる。しかしながら、これまで自閉症の運動障害については症例報告等でさまざまな事実が指摘されてはきたが、自閉症の運動障害そのものを取りあげた研究は前述したDeMyer (1976) の研究や最近のLeary & Hill (1996) の研究を除けば少ない。最近になって、Asperger症候群と運動障害の関連性を指摘する研究 (Wing, 1981; Gillberg, 1989; Cox, 1991) やAsperger症候群児と高機能自閉症児を診断的に区別する特徴として運動

障害が利用できるかどうかを吟味する研究 (Burgoine & Wing, 1983; Manjivione & Prior, 1995) などAsperger症候群にまつわる研究が見られるようになったが、自閉症の運動障害と、自閉症状さらには自閉症の本態との関連に直接的に言及した研究は依然として少ない。

ところで、自閉症児で問題となる身体障害は中田 (1984) も指摘しているように大脳生理学的な機能や構造の障害だけに還元できない性質を持っており、むしろ彼らの自我の態様や意識の作用さらには他者を含めた環境との関係で立ち現れる自己の存在様式などと密接に関係していると思われる。それゆえに自閉症児の運動障害についても大脳生理学の水準での機能や構造との関連を追求する以前に、運動障害と彼らの自我や意識の作用、さらには自己の存在様式との関連を明らかにする必要があり、そのためにまずは彼らが示す運動障害を行動水準で詳細に記述できなければならない。

そこで、本研究では自閉症児が生活の中で示す運動障害を自我や意識の作用、自己身体とものや他者との関係、身体図式の形成などとの関連で整理し、記述することを目的とする。

方 法

1. 対象児

対象児は自閉性障害児の男児6名、女児3名の計9名であった。年齢は3歳0カ月から6歳1カ月の範囲にあった。6歳児の2名は公立の幼稚園に就園しており、残りの7名は公立の保育所に在籍していた。なお、対象児の全員が障害児保育を受けていた。

対象児には新版K式発達検査を実施し、それぞ

表1 対象児の内訳

対象児	性別	年齢	DQ
A	男	3:00	63
B	男	3:04	68
C	女	3:06	38
D	女	4:02	50
E	女	4:02	61
F	男	5:01	58
G	男	5:02	54
H	男	6:00	79
I	男	6:01	64

れの発達指数 (DQ) を表1に示した。C児を除けば残りの7名は発達指数が50以上にあり、軽度の発達遅滞の範疇に入る。

2. 手続き

対象児の保育所・幼稚園での行動を1カ月に1回の割合でVTRに収録した。対象児の日常における自然な姿勢や動作を収録するために、収録場面は午前もしくは午後の自由遊び場面を中心に設定された。また、基本的な運動が生じやすい「リズム体操」、「ボール遊び」などの運動遊びが設定保育で組まれている場合はそれらの場面での行動も収録した。1回の収録時間は約30分として、各対象児につき5回ないし6回分を収録した。その際、できるだけ多様な場面での各児の行動が収録できるように心がけた。

3. 分析方法

分析は筆者を含む2名の評定者によって行われた。それぞれの評定者は対象児が示す姿勢や運動・動作のうち不自然で「ぎこちない」と感じられる部分を抽出し、自作の記録用紙にそれらの姿勢や運動・動作をできるだけ詳細に記述する。その後、2名の評定者間でそれぞれの記録を交換し、一致した見解が得られた姿勢・動作について前後の文脈などを参考に、それらの姿勢や運動・動作の背景について協議し、意味づけを行った。

結果と考察

対象児の「ぎこちない」姿勢や運動・動作はほぼ6つのカテゴリーに集約された。表2は対象児について各カテゴリーの出現状況を示したものである。この結果を概観とすると、年齢の高い対象児で「ぎこちない」運動・動作が多く出現しているように思われるが、年齢の低いB児でも5つのカテゴリーに該当する「ぎこちなさ」があり、この結果からは一概に発達の傾向は指摘できない。

以下、それぞれのカテゴリーごとに具体的な事例に基づいて考察を進める。

1. 左右の非対称

図1-1はG児の歩行動作である。歩行時の左右の手の振りが非対称的であり、左手の振りが弱かった。この手振りの非対称性は、全員にみられ、なぜか共通して左手の振りの弱さが認められた。9名のうちB児とH児が左利きであったが、手振りに関して他児と異なる特徴は見いだせなかつ

表2 「ぎこちない」姿勢・運動の出現状況

対象児	A	B	C	D	E	F	G	H	I
左右の非対称	○	○	○	○	○	○	○	○	○
準備動作			○	○	○	○	○	○	
強調・切り取り	○	○	○		○		○	○	○
指さし		○			○	○	○	○	○
動作の模倣		○				○	○	○	○
鏡映像反応	○	○		○	○	○		○	○

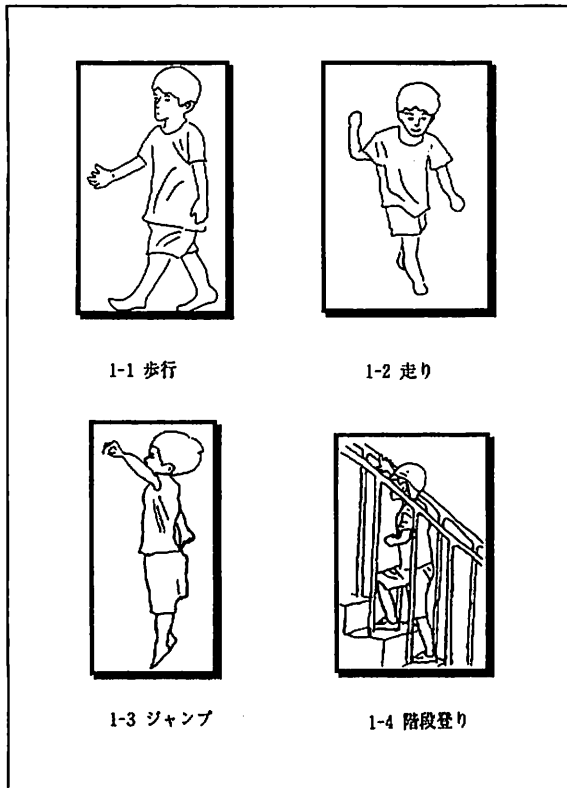


図1 左右の非対称

た。したがって、手振りの非対称性は利き手との関係は薄いと見てよい。意図性が希薄であると思われる自然な歩行動作に出現する非対称性は、彼らの姿勢・運動が根元的な問題を孕んでいることを推測させる。つまり、歩行動作の左右非対称性をもたらす原因として認知的な機能の問題よりも、神経生理学的、あるいは生物学的な背景を想定すべきなのかもしれない。

歩行動作以外にも動作の非対称性は様々な運動の局面で認められた。図1-2はI児が他児を追いかけて走っている時に出現した奇妙な手の動きを示している。走りながら方向を変える時に曲がる側の腕が上に挙がるのである。まるで、方向指示器のような動きであった。この特徴は状況特異的に出現するのではなく、さまざまな場面で走行時に現れた。また、本児ほどは顕著ではないが、他の2名の対象児でも類似した動作が見られた。いずれも走行時に方向を変える時に曲がる側の手の振りが小さくなり、大幹の側に屈曲するのである。

る。走行時に曲がる側の手が屈曲したり、手振りが小さくなることは、遠心力による身体の外側への振れを小さくするために無意識的にとられた腕上げの姿勢が、自閉症児特有な固執特性によって儀式化、もしくはパターン化したものとみなすこともできる。

図1-3はF児のジャンプ動作を示している。本児はタイミング良く両足飛びは出来るが、ジャンプ時の両手がばらばらになっている。

また、図1-4はB児の階段登りの動作を表している。手すりを持っていない方の手が折れ曲がり、緊張している様子が窺える。

図1-1のような自然な歩行動作に比べて、走り(図1-2)、ジャンプ(図1-3)、そして階段登り(図1-4)などは動作そのものが主題化され、意図性が明白な動作であるため、歩行動作と同列に論じることはできないであろう。動作の左右非対称性の発生機序については今後のさらなる資料の集積と詳細な分析を待たなければならないが、上記の手の動作の非対称性は自閉症児の一つの特徴として記述できる。

2. 準備動作

図2-1はE児がプール遊びの最中にジャンプして身体の回旋をする前にとった姿勢である。数秒間この姿勢で動きが停止した後、ジャンプによる身体の回転動作が出現した。動作を起こす準備としての姿勢から動作開始までの時間が長いのである。類似した現象が他の対象児でもみられた。図2-2はB児がブランコの支柱に手を置く前にとった姿勢を示している。つまり、支柱に手を置く姿勢がかなり前から準備されているのである。同様に、G児は図2-3のように右手をあげて前方にある柱の方に歩いて行き、そのままの姿勢で柱に手を置き寄り掛かった。こうしたことは、他者への関わりの際にも見受けられた。図2-4はG児が前方の保母を叩こうとして手をあげながら、保母に接近しているところである。この行動もやはり前述の例と同様に準備動作として分類できる。

以上の準備動作はそれぞれの対象児で行動全般にわたって常に出現しているわけではない。したがって、上記の準備動作が出現するには、それなりの条件があるに違いない。考えられることは、

習性の身体として自己身体の姿勢や運動が背景に退いている時は自然な動作が可能であるが、自己身体の姿勢・動作が主題化された時、つまり動きや姿勢が意識化された時に上記のような姿勢・運動の準備から開始までの時間的ズレが生じることである。動作の目的が主題化され動作の表象が主導的に身体を支配するようになると、表象によって形づくられた目的としての身体姿勢のみが際立ち、結果的に対象との関係に基づく身体の姿勢や運動のコントロールが希薄になることによって、上記の準備動作が出現してくるのではないだろうか。ただ、どのような行動の局面で自己身体の姿勢や動作が主題化されてくるのかということについては不明であり、今後検討しなければならない。

もう一つ指摘しておかなければならない点は準備動作として観察されたものは、すべてが手の動

きに限られていたということである。手は身体の中の部位にも増して可動性が高く、かつ可視性も高い。したがって、手は特に身体各部の中で動作の表象が最も形成されやすい部位であるといえる。このことが準備動作が手の動きに限られていることと関係しているものと思われる。この点については後でも取りあげ考察するが、自閉症児における身体図式の形成との関係で興味深い。

3. 動作の強調・切り取り

図3-1はI児のケンケン動作である。片足を上げて、ケンケン様のジャンプをするが、両手はテーブルの上につき、身体を支えている。身体全体がケンケン動作に関与するのではなく、動作の一部つまり片足のジャンプだけが再現されているだけでケンケンになっていない。本児は片足立ちが可能で、なおかつジャンプも難なくできているにもかかわらず、母親にケンケン動作を要求されるとためらわずに図3-1の姿勢をとり、何ら違和感を感じていないように思われる。

図3-2はF児が保母の指示に従って足踏みをしている場面である。本児は片足だけを高く上げ、両手はズボンを持って緊張した状態でその姿勢を保持している。足踏みの際の足上げ動作だけが強調されているのである。

また、F児は他児が保母を相手にデングリ返りをしている様子を見た後、保母に手を差し出し、保母が本児の両手を握るとすぐに図3-3の姿勢をとった。頭の位置は本児が観察した他児のそれと同じであったが、足は床についたままで全く動かそうともしていない。図3-4は本児がその後、再度保母に近づいた時の姿勢である。今度は最初から首を後方に曲げ、両手を上げてから保母に近づいた。しかしながら、保母との位置関係が逆になっているため戸惑い、保母に促されてようやく図3-3の姿勢になった。本児はデングリ返りの運動よりも図3-3の姿勢を保持することを楽しんでいるようであった。

図3-5は子どもが跳び箱をまさに飛び越えようとしている瞬間にみえる。実はこの姿勢の前にF児は跳び箱をよじ登り、最上部でおもむろに開脚して図のような姿勢を作ったのである。つまり、この図は跳び箱を飛び越えている一連の動作の瞬間ではなく、その瞬間だけを切り取って再現した



図2 準備動作

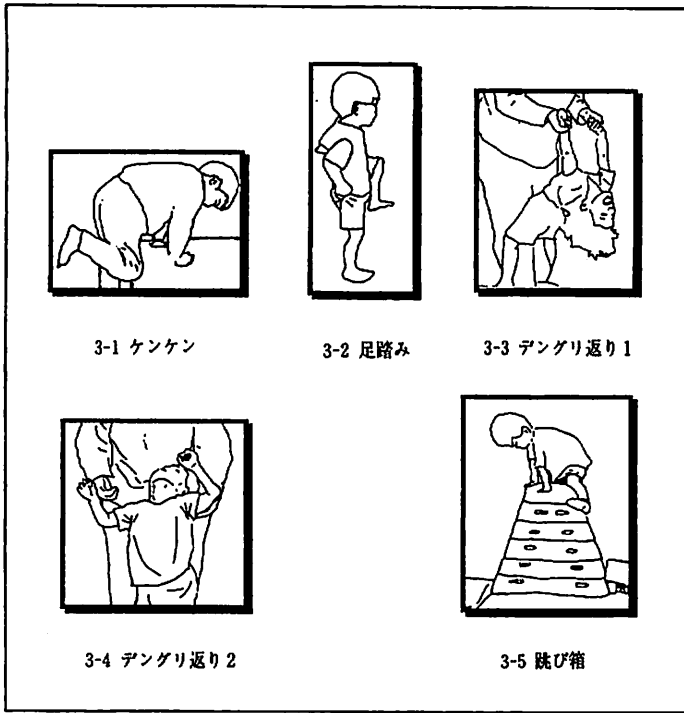


図3 動作の強調・動作の切り取り

姿勢にすぎないのである。

以上に指摘した動作は特定の動作もしくは特定の身体部位に焦点化した動作のみが再現され、一連の動作の全体が再現されていない。

ところで、自閉症児の中には特定の領域において特異才能を示すサヴァン症候群児と呼ばれる子ども達がいる。描画に才能を持つナディア(Nadia)という自閉症児の事例はこの子どもの事例が一冊の本となって出版されたこともあって特に注目を集めた (Selfe, 1977)。その研究によれば、Nadiaは3歳半の時、突然に並外れた描画の才能を現しはじめた。彼女が好んで描いた馬の絵は優れた芸術家を思わせる程のものであった。彼女の特異才能を調べた研究者たちによると彼女は直感像、すなわち実世界で以前にみた光景を心の目に鮮明に見る能力を持っていたといわれている。つまり、彼女は自分が見たものをイメージ化し、それを比較的長い時間にわたって保持できるという能力を持っていたというのである。ところが、この並外れたイメージ化の能力とは反対に、彼女は絵を意味のある実在として見る能力が非常に乏しいこと

が指摘された。Nadiaは対象や見ている画面の視覚的な像を心の中に保持することはできるが、通常はそれらを意味のカテゴリーに分けられないのだった。

一般に対象の運動はそれを観察する観察者にとって全体として統一的に把握され、特定の意味としてしか捉えられない。しかしながら、動きが意味へと抽象されない場合を考えれば、一瞬一瞬が切り離され、動きが全体として捉えられず、特に印象に残る一瞬だけが切り取られて鮮明に保持される可能性が想定できる。先のNadiaが疾駆する馬の正確な足運びを忠実に再現したことは、むしろ運動から意味を抽象できないがゆえに可能になったと考えるべきなのかもしれない。さらに、Nadiaに想定されるような意味の抽象の困難性はサヴァン症候群に限らず、自閉症児全般に見出される特徴の一つである。したがって、自閉症児が動き

を認知する際は、先に指摘したような瞬間の写し取りに多少とも類似した捉え方がなされていることが予想され、その表現型が先に指摘したような対象児の姿勢や動作であるとみることができる。つまり、対象児にみられた動作の強調や切り取りは、動きから意味を抽象できないという彼らの認知特性そのものに原因があると考えてよいのではないだろうか。

4. 指さし

一般に自閉症児には指さしなどの伝達的なジェスチャーが見られないといわれている (Park, 1986)。このこと的背景には、象徴機能の障害 (Wing, et al., 1977; Ungerer & Sigman, 1981; Sigman & Ungerer, 1984; Mundy et al., 1987) が存在し、言語発達や象徴あそびの出現を遅らせているといわれている。

本研究で対象とした自閉症児の半数において、指さしと形象的に類似した行為が認められた (図4-1)。しかしながら、これらは明らかに視線や身体の向きとは違う方向をさし、指さしの方向に指示物と思われるものが存在しなかったり、特定

できなかつたりすることから、象徴的身振りとしての指さしとはその性質を異にするものであると推察される。さらにこれらは他者がいない場面でも出現することから要求や叙述などの伝達的な意図を伴わない動作でもあると思われる。対象児と同年齢の健常児集団では盛んに指さしが登場しており、対象児は保育所生活において他児の指さしを比較的頻回に観察できる。さらに対象児の年齢段階になると、母親や保育士なども対象児に指示する際に指さしを多用しはじめる。おそらく対象児の生活全般にわたって彼らの周囲に散見される指さし動作はその象徴的な写し取りを促進させるように働く可能性は十分に考えられる。先にも指摘したように可視性、可動性が高い手の動作は身体の他の部分に比べてその動作模倣は容易であるからである。

以上のことから、図4-1に見られる動作は指さし本来が持つ象徴性や伝達性が欠落した、手の形象性のみを模倣によって獲得したものであると結論してよいであろう。

ところが、これらの動作とは幾分異なった意味を持つと思われる動作がB児に認められた(図4-2)。図からも明らかなように、本児の指さしは指さす方向と視線は一致し、他者からもその指示物が特定できる。図のように本児はカレンダーを指さした後、実際に壁に掛かっているカレンダーに近づき前月分のカレンダーを破いた(当日は月のはじめであった)。このことから本児の指さしは明確に指示物を持っていることになる。しかしながら、この指さしの奇妙な点は伝達の要素を持

たないことである。この指さしは他者へ伝達することを意図して行われたのではなく、むしろ自分自身へ向けられたものとして考えるべきである。つまり、この指さしは行動を開始する際のきっかけとしての一種の儀式的行為であるとみなした方がよい。他者への伝達性を意図しない本児の指さしは、本来の指さしを持つ抽象性や象徴的機能を持つ必要はない。したがって、目指される対象が「客観的に、すなわち定位の零点としての自己の身体のもとに再組織化される」(中田, 1989)必要はなく、ただ行為のきっかけとして習性的な動作を儀式的に遂行するだけでよい。

指さしが遂行されたからといって自己の身体を物体として対象化し、客観的空間上に定位の零点として位置づけ、その上で目指される対象を再組織化できているわけではないので他者の指さしの理解になると途端に問題性が顕現化してくることになる。図4-3は保育士が棚を指さし、本児に画用紙を取ってくるように指示している場面である。本児は保育士の指さしによる指示を理解できず、保育士の指さす手を見たり、手の下を見たりと、その意味を図りかねて戸惑っている。保育士の指さしと言葉かけによって何かを探するような素振りをすることから、もしかすると指さしは何かを伝達していることを理解できているが、それが何を意味しているのかが分からないのかもしれない。

他者の指さしを理解するためには自己の身体を具体的な状況から切り離し、つまり自己身体とものとの関係から離れて、自己の身体軸を他者の地点に移動させ、重ねることができなければならない。自己身体を客観的空間上に位置づけることができない本児の場合には、当然のこととして具体的な状況を離れ、自己の身体軸を他者の地点に移動させること、すなわち他者のパースペクティブのもとに対象を再組織化することはできない。図4-3にみられるB児の戸惑いには以上のような背景が想定できる。

このように考えると、自閉症児の指さしの出現の少なさ

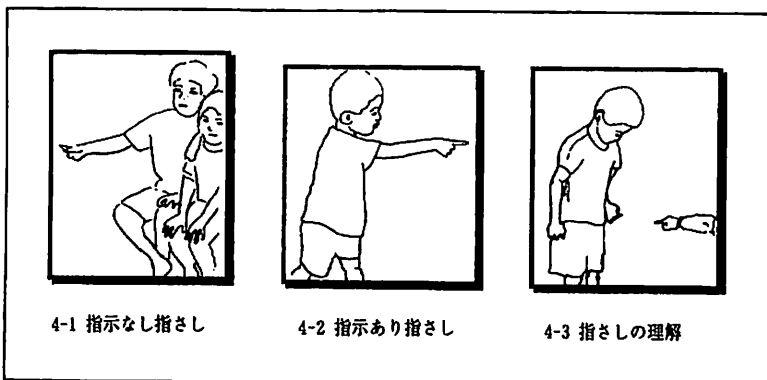


図4 指さし

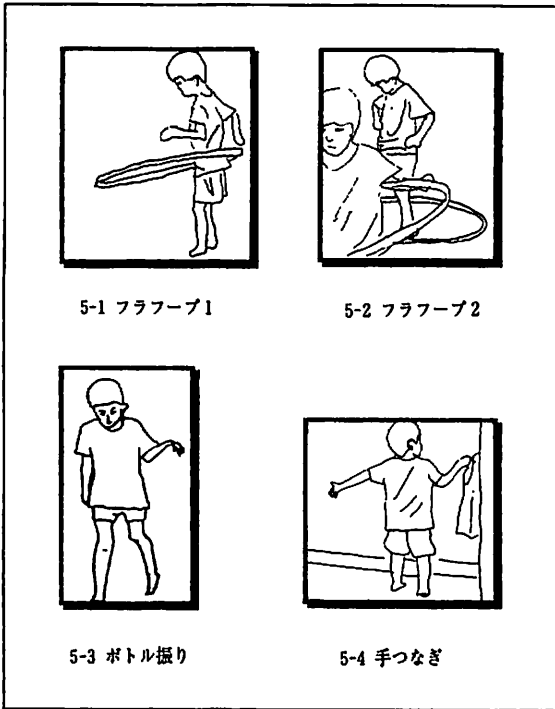


図5 身体模倣

と伝達機能を伴わない指さしなどの特異性は、自己の身体を対象として措定し、客観的空間上に位置づけることができないことに起因していると思われる必要がある。換言すれば、彼らの指さしの問題性は身体図式の形成不全の問題に還元できるのである。

5. 身体模倣

一般に自閉症児には模倣があまりみられないことが指摘されているが (Curcio, 1978; Dawson & Adams, 1984; 若林・水野・西村, 1977), 本研究では明らかに模倣動作と思われるものが随所に認められた。例えば、次に示す例がそうである。

保育所での自由遊びの最中、I児は他児がフラフープを回しているのを見て、自らも床にあったフープを持ち上げて落とした。フープを回転させずにただ落とすだけなので、当然ながらフープは落ちることになる。まるでフープを持ち上げ、手を離すとひとりでにフープが回り出すかのように、全くフープを回転させようとはしない。フープと自己の身体との関係が理解できていないようである。数回にわたって、同じ動作を繰り返した

後で、本児は目前でフープを上手に回している他児の動きをしばらく凝視する。その直後、今度は図5-1にみるようにフープを身体に接触させ、手を振ってフープを回転させた。フープは1~2回まわるが腰や体幹のひねりを随伴していないため、すぐに落ちてしまう。何度も挑戦するが上手く行かず、最後にフープが床に落ちた直後に図5-2に示すように手を下に向け、空中を腕でかき回すような動作を行った。

本児は他児のフープ回しを見てフープに挑戦したことからすると模倣が起きているように思える。しかし、その後の本児の行動は模倣の生起を疑わせるのである。最初に本児がとった行為はフープを取りあげ、そして手を離すというものであった。これは他児のフープ回しの動作に着目してその動作を自己身体で再現するという、いわゆる動作の模倣とは異なっている。本児の行為は動作の再現ではなく、身体の周りを回っているフープに焦点化したために生じたものであって、身体の周りをフープが回っている状態、すなわち動作の結果として成立する「状態」のみを再現しようとしているのである。本児の行為はいわゆる「結果の模倣」(Guillaume, 1926)と呼ばれるものである。ところが、数回挑戦して結果が再現されないとわかると他児を再度観察し、新たに手の振りを行ったフープ回しを試みるのである。おそらく、本児は他児の行動を観察した結果、手の動きとフープの動きの關係に気付き、そのことを自己身体で再現しようと試みたのであろう。この時点では「結果の模倣」から脱して、結果を生み出す動作に関心が向きつつある。しかしながら、腰の回旋を含む体幹の動作が再現されていないため手の振りだけではフープは回転しない。そのうちフープ回しと直接的には関係しない行為、すなわち自分の手をぐるぐる回すという、いわば呪術宣誓的な行為をすることで「結果の再現」を期待するのである。

本児の模倣は自己と他者の動作の類似性に焦点化した、いわゆる動作の模倣ではなく動作の結果生み出される「状態」の再現、先の例でいえば身体の周りをフープが回転する状態の再現を意図した行為が中心をなしているといえる。結果が再現されないと一時的に結果を生み出す動作へ注意が

向くことになるが、その動作対象は極めて限定されているために（手のみに限局）期待した結果は再現されず、結局「結果の模倣」に回帰してしまうことになる。

I児にみられたような手の動作の写し取りは他の対象児でも頻繁に見られた。B児は自分の前を女兒が空のペットボトルを前後に振りながら歩いて過ぎ去っていくのを凝視していた。その直後にB児は当該の女兒と同じように前後に手を振った。その場面が図5-3である。本児の姿勢と運動は、直前に見た女兒の手の動きを同型的に写し取ったものであることは明らかである。

こうした手の動きの写し取りも常に生起するというわけではなく、ある条件が整わないと出現しない。図5-4は生身の他者とは自発的に手つなぎをしないG児が壁に掛かっているエプロンと手をつないでいるところである。この動作が出現する前の「お遊戯」の時間に、担当の保母は嫌がる本児に無理矢理に他児との手つなぎを強要していることから、この動作はその時点での手つなぎの延滞模倣であることは明らかである。この動作もB児と同様に手だけの動きの再現に留まっており、身体全体の動きは再現されていない。さらに、もっと重要なことは、この動作は遊戯が終わって他児が園庭に出て行き、本児一人が部屋に残っているときに出現したということである。同様な事態は自閉症児の行動観察でよく目にするところである。ある特定の動作を「私」が完全にかつ主導的に行える状況においては、彼らが最も嫌う被動的に経験させられた動作（先の例では「強制された手つなぎ」）でも再現されてくるのである。中田（1984）によると自閉症児の身体運動の特徴は「自我そのものが機能している状況を確保することだけが重要である」とされている。それゆえ、図5-4に示した状況、つまり他者の関与が一切存在せず、なおかつ自我の赴くままに対象が従う（エプロンの操作）状況では、以前に経験した動作が再現されやすくなるのであろう。

以上の知見から、次のようにまとめることができる。すなわち、自閉症児にみられる模倣行動は「結果の模倣」であり、結果をもたらす動作自体へ意識が向かないために動作の類似性比較が生じない。それゆえに彼らの模倣は真の模倣とは言い

難く「疑似模倣」（麻生，1988）と呼ぶべきであろう。このことは彼らの身体図式が未形成であることと関係するのかもしれない。先に指摘したように、手の運動の模倣は比較的容易に成立するものの、体幹の運動になると途端に困難になるのは、手の身体図式は形成されているが、体幹部の身体図式が未完成なために生じると考えることができる。たとえば、I児は「くすぐりっこ」遊びの時、一方的にくすぐられていた本児が、母親からくすぐることを要求され母親の胸にそっと手を置いたという。つまり自己のくすぐったい感じと身体部位が対応していないため母親がくすぐったく感じる身体部位を特定できないのである。身体の部位の違いによって身体図式の形成が異なるのは、おそらくそれらの可視性や可動性と関係があるのであろう。

二つ目は、手の運動の模倣であっても、それらが生起するには「自我そのものが機能している状況が確保されている」という条件が整わなければならないということである。自我が機能する状況を確保することのみが主題となり、それらの動作が他者へ与える影響、つまり対他意識は全く作用していないという特徴を指摘できる。

6. 自己の鏡映像への反応

図6-1はA児が鏡映像を見ながら髪の毛を指で引っ張っている場面である。本児にはその他、舌の出し入れや手の上げ下げなどの行動が鏡に向かうと必ずといって良いほど頻回に出現した。本児は自己の運動と鏡映像の動きの連動性に気付き、そのこと自体を楽しんでいるようである。これらの観察がなされた数カ月後に、新たな興味深い現象が本児に観察された。図6-2と図6-3がそれである。図6-2はA児が園庭での遊びから帰ってきて、玄関の靴箱に手を置き廊下を隔てた対面の壁にある鏡に映っている自分の鏡映像を不思議そうに凝視している場面である。その直後、本児は図6-3のように空っぽの靴箱の中をまるで何か怖いものを見るような姿勢で覗き込んだ。本児は普段は他者の顔を見つめることはほとんどなく、また他者から見られていることに敏感に反応することはないことから、図6-2と図6-3の場面は極めて特異な事態であった。

Zazzo（1993）は鏡映像における自己認知の発

違を検討して次のような発達段階を見出した。すなわち、自己の鏡映像に対して実物の他者に働きかけるのと同様な反応をする段階（第1段階：1歳以前）から、自らの運動と鏡映像の動きの連動性を積極的に確かめる反応が出現する段階（第2段階：1歳から1歳半）、そして、鏡の前で自己の鏡映像に困惑したり、鏡を忌避する反応が出現する段階（第3段階：1歳半から2歳）を経て、鏡映像の自己認知が成立し、鏡が虚空間であることを完全に理解するようになる（第4段階：2歳以後）。

この発達段階に照らして本児の鏡映像に対する反応を解釈すると次のようになる。すなわち、本児は外部知覚的に捉えられた身体の鏡映像と、自己受容的ないしは内受容的感覚によって内側から感受される身体との対応関係を両者の運動の連動性によって発見し（第2段階）、鏡映像は他者とは様相を異にする「自己の動きと連動して動く奇妙な他者」（Zazzo, 1993）もしくは「分身」（百合

本, 1980）として捉えられるようになると（第3段階）、その「奇妙な他者」としての鏡映像に対しては周囲に存在する生身の他者に対する時の無関心や無反応と違って、むしろ逆に注意を喚起され困惑や恐怖のまなざしが向けられることになる。図6-2と図6-3の本児の反応は鏡映像を「奇妙な他者」、「他者らしくない他者」もしくは「分身」としてみた時に生じる困惑や恐怖としてみることができる。

ところで、鏡映像を凝視した直後に現れた靴箱を覗くという行為はどのように考えたらよいのであろうか。このことに関連するエピソードがWallon (1949) によって記述されている。それによれば、Darwinの子どもが生後35週の頃、自分の名前が呼ばれる度に自己の鏡映像を見るために鏡を覗いたというエピソードを紹介し、このことは子どもが自分の名前を呼ばれるのを聞いて、それを自己感覚的自己に向けるのではなく、鏡に映った外部知覚的な像にあてがっていることを示していると解釈された。図6-2の本児の行為は鏡に映った「奇妙な他者」を眺めている自己に生じた内部感覚としての困惑や不思議さを「分身」としての鏡映像にあてがった結果、生じたものであると考えることができる。つまり、図6-2の鏡映像に現れた困惑は鏡映像に対する自己の困惑であるものの、「奇妙な他者」が困惑して不思議そうにこちらを眺めていると理解し、その対象は何なのかを本児も「奇妙な他者」と同じ姿勢と向きで眺め探索したのが図6-3であると考えるのである。

本児は身体の鏡映像と、自己受容的ないしは内受容的感覚によって内側から感受される身体との対応関係を両者の運動の連動性から発見できているものの、鏡が虚空間であることを理解できていないために鏡映像の自己認知には至っていない。すなわち、本児は自己受容的ないしは内受容的に感じている身体を外部知覚化した身体像から切り離すことができていないため、鏡像空間の実在化という錯覚に陥り、自己の鏡映像を「奇妙な他者」として眺めているといえる。

図6-4に示す事態も同様に「奇妙な他者」もしくは「分身」として鏡映像を理解していることによって生起する。図6-4はI児が前方の鏡を

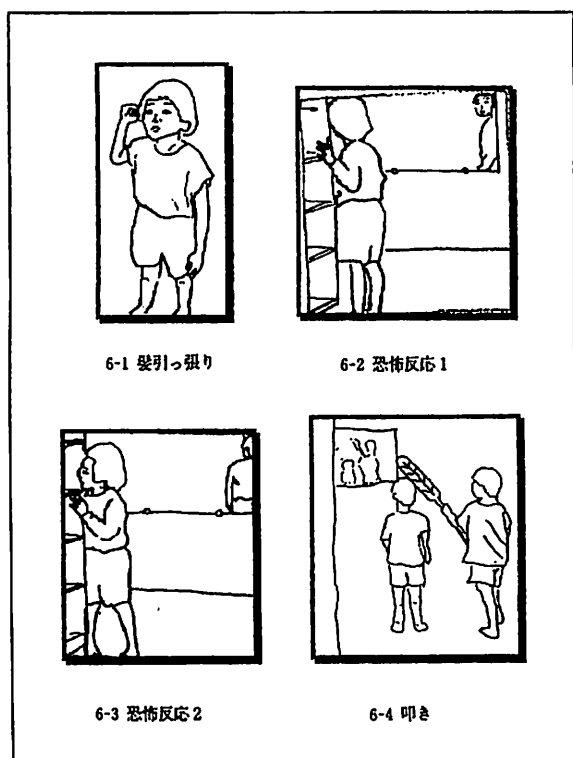


図6 鏡映像反応

見ながら木製の櫛(踊りの道具)で斜め前方に立っている他児を叩いている場面である。本児はこれまで他児が接近すると一定の距離と角度を保持し、接触することはなかった。本児から関わりを持ちたり、ましてや図のように他児を叩いたりするようなことは決してなかった。そのため、この行動は大変奇異に感じられた。このように生身の他者に対しては出現しない行動が、鏡の中に見られるということは本児にとって鏡映像が自己の意図と行為が結びついたリアリティのある世界として見えているのではないだろうか。自分の意図を「分身」としての鏡映像にあてがうことで鏡映像の行為として他者を叩くことが実現するのである。本児にとって鏡は実空間よりも意図と行為が結びついたよりリアリティの高い空間として捉えられているのかもしれない。

以上の知見を概括すると、本研究で対象とした自閉症児のうち鏡映像の反応が捕捉できた7名の全員に共通して認められたことは鏡映像の自己認知に未だ到達していないということであった。百合本(1980)によれば、自閉症児は鏡映像を掴もうとしたり、鏡の後ろに手をまわしたりすることはないが、自己の鏡映像を「他者から見た自分の姿」として認識できていないと考えられ、自閉症児はLacan(1966)の言うところの「鏡像段階」にとどまっているとされている。先に指摘したように本研究の対象児も自己の鏡映像を「奇妙な他者」、「分身」としてみなしている限りにおいては、彼らも「鏡像段階」にとどまっていることは明らかである。

なぜ、自閉症児は「鏡像段階」にとどまっているのであろうか。この問いについて、加藤(1996)は興味深い指摘を行っている。彼はZazzo(1993)の研究についての論考の中で「鏡像段階」に特徴的に出現する自己の鏡映像への忌避反応の発達の由来について、浜田(1992)の主張に基づきながら次のように述べている。すなわち、子どもと他者の関係性の発展は子どもと他者の身体の相互性が発展することであると捉える。その身体の相互性は他者身体と同じ姿勢や運動を行う同型的交流と、他者身体と〈能動-受動〉のやり取りを行う相補的な交流の二つの型に区別できる。そして、発達的には同型的交流の盛んな時期から相補的の交

流による他者との相互性へと発展すると言う。他者との交流が同型的反応を主とする段階にとどまっていたとすれば、反応にズレがあるかないかは違うものの同型的反応という点では他者も自己の鏡映像も同じであって、そこでは依然として自己鏡映像は他者として把握されたままでもおかしくない。しかし、自他の相補的交流が深まって他者の身体は相補的な反応を返す身体として把握されるようになると、常に瞬時に同型的反応しか返すことのない自己の鏡映身体像は奇妙な他者身体像として認知されるようになる。これが鏡の自己像に対する困惑と忌避の反応の意味であるというのである。

対人社会性の障害を特徴とする自閉症児でも、本研究が対象とした比較的軽度の自閉症状を示す子ども達の場合、発達とともに生活範囲が広がるにつれて他者との接触の機会は急速に増大する。生活における動作を中心とした他者とのやりとりの機会を通して身体レベルでの他者との交流は同型的交流はもとより相補的交流も限定された範囲にあるといえ増加する。したがって、健常児(12ヵ月-18ヵ月)に比べて、その出現は大幅に遅れるものの、他者との相補的な交流経験に裏打ちされた自己鏡映像への困惑や忌避反応は本研究の対象児でも出現したのであろう。ただ、身体の水準を超えて表象の水準における他者とのやり取りになると自閉症児は極端に困難性を示すようになるため、鏡の自己像は自己の虚像であり「他人から見た自分の姿」であるとして鏡映像の自己認知を成立させるためには多くの困難を伴うことは予想できる。自閉症児が「鏡像段階」を脱し得ないのは自己の身体を客観的な空間に位置づけることができないうという表象水準の問題に起因しているのかもしれない。年長の自閉症児を対象とした詳細な観察が必要である。今後の検討課題としたい。

参考文献

- 1) 麻生 武(1988)：模倣と自己と他者の身体 (岡本夏木 編著、「認識とことばの発達心理学」、ミネルヴァ書房)
- 2) Burgoine, E., & Wing, L. (1983) : Identical triplets with Asperger's syndrome. *British Jou-*

- Journal of Psychiatry, 143,261-265.
- 3) Cox, A., D. (1991) : Is Asperger's syndrome a useful diagnosis ? Archives of Disease in Childhood, 66,259-262.
 - 4) Curcio, F. (1978) : Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 8,281-292.
 - 5) Dawson, G., & Adams, A. (1984) : Imitation and social responsiveness in autistic children. Journal of Abnormal Child Psychology, 12, 209-226.
 - 6) DeMyer, M. (1976) : Motor, Perceptual-motor and intellectual disabilities of autistic children. In L.Wing (Ed), Early childhood autism : Oxford : Pergamon Press.
 - 7) Gillberg, C. (1992) : Autism and autistic-like conditions : Subclasses among disorders of empathy. Journal of Psychology and Psychiatry, 33,813-842.
 - 8) Guillaume, P. (1926) : L'imitation chez l'enfant. Halperin, P. (Trans.) : Imitation in Children. The university of Chicago Press. 1977.
 - 9) 浜田寿美男 (1992) : 「私」というものなりたち, ミネルヴァ書房.
 - 10) Hermelin, B., & O'Connor, N. (1970) : Psychological experiments with autistic children. Oxford : Pergamon Press.
 - 11) 加藤義信 (1996) : ザゾと「フランス学派」 (浜田寿美男 編, 「発達理論 一明日への系譜一」, 別冊「発達」20, ミネルヴァ書房)
 - 12) Lacan (1966) : 宮本忠雄 訳「わたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階 一精神分析の経験が我々に示すもの」, エクリI, 弘文堂, 1972.
 - 13) Leary, M., & Hill, D. (1996) : Moving On : Autism and Movement Disturbance. Mental Retardation, Vol.34,1,pp.39-53.
 - 14) Manjiviona, J., & Prior, M. (1995) : Comparison of Asperger Syndrome and High-Functioning Autistic Children on a test of Motor Impairment. Journal of Autism and Developmental Disorder, Vol.25, No.1, pp.23-39.
 - 15) Mundy, P., Sigman, M., Ungerer, J., & Sherman, T. (1987) : Nonverbal communication and play correlates of language development in autistic children. Journal of Autism and Developmental Disorders, 17 (3), 349-364.
 - 16) 中田基昭 (1984) : 重症心身障害児の教育方法 一現象学に基づく経験構造の解明一, 東京大学出版会.
 - 17) Ornitz, M. (1974) : The modulation of sensory input and motor output in autistic children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 4, 197-215.
 - 18) Park, C. (1986) : Social growth in autism : A parent's perspective. In E.Schopler & G.Mesibov (Eds.), Social behavior in autism. New York : Plenum.
 - 19) Selfe, L. (1977) : NADIA : a case of extraordinary drawing ability in an autistic child. Academic Press.
 - 20) Sigman, M., & Ungerer, J. (1984) : Cognitive and Language skills in autistic, mentally retarded, and normal children. Developmental Psychology, 20, 293-302.
 - 21) Ungerer, J., & Sigman, M. (1981) : Symbolic play and language comprehension in autistic children. Journal of the American Academy of Child Psychiatry, 20, 318-337.
 - 22) 若林慎一郎・水野真由美・西村辯作 (1977) : 自閉症児の模倣についての一考察, 児童精神医学とその近接領域, 18, 271-285.
 - 23) Wallon, H. (1949) : Les origines du caractere chez l'enfant-Les preliques de sentiment de personnalite-. Presse Universitaire de France. (久保田正人 訳, 「児童における性格の起源」, 明治図書, 1970.)
 - 24) Williams, D. (1992) : NOBODY NOWHERE (河野万里子 訳, 「自閉症だったわたしへ」, 新潮社, 1993.)
 - 25) Williams, D. (1995) : Appendix Hints in Autism (An Inside-Out Approach, pp.286-312, Jessica Kingsley.) 「自閉症を理解するためのキーワード集」 (林サダオ 訳), imago 10月号, pp.226-256.

- 26) Wing, L. (1976) : Diagnosis, clinical description and prognosis. In L. Wing (Ed.), *Early childhood autism*. Oxford : Pergamon Press.
- 27) Wing, L. (1981) ; Asperger's syndrome ; A clinical account. *Psychological Medicine*, 11,115-129.
- 28) Wing, L., Gould, J., Yeates, S., & Brierly, L. (1977) : Symbolic play in severely mentally retarded and autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 18,167-178.
- 29) 百合本仁子 (1980) : 自閉症と鏡 (現代のエスプリ, 155,191-200,至文堂.)
- 30) Zazzo, R. (1993) : *Reflets de miroir et autres doubles*. P.U.F., Paris.

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力頂きました保育所・幼稚園の幼児とその保護者ならびに関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。本研究の対象児の皆様の健やかな成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。